

データでみる軽トラ市

(その15)

愛知大学 三遠南信地域連携研究センター長 戸田敏行
地域政策学部教授

分散的な小規模軽トラ市の需要

可動商店街は、従来の集合型「軽トラ市」と地区分散型の小規模「軽トラ市」(7月号で取り上げた軽トラマーケットのような形態)、そして個別の移動販売が一体化したものと5月号に記した。その空間範囲は、概ね市町村単位が良いのではないかと考えている。くだけた言い方をすれば、全市まるごと「軽トラ市」である。勿論、人口減少が著しい町村相互での「軽トラ市」連携は不可欠であるが、住民生活を維持する自治体として可動商店街の導入戦略を持つことが重要なことであると思える。全市的な可動商店街の実態があれば、そこからデータを示しうるが、現状ではそうした事例を見出すことが出来ない。集合型「軽トラ市」はこれまで述べてきたところであり、移動販売についての事例も多い。そこで今回は、分散型の小規模「軽トラ市」の地区需要はあるのか、その状況についてのアンケート調査データを紹介したい。

対象地域は、本学が立地する愛知県豊橋市である。人口は37万人、政令市に次ぐ自律性を持つ中核市であり、愛知県東部の拠点都市である。地形的には豊橋駅からほぼ同心円状に市街地が広がる。農業も全国屈指であり、市街地の周辺には農地が広がっており、都市

から農村までを有する自治体である。

調査は、2020年10~12月に豊橋市と共同で実施したものである。時期的にはコロナ禍の影響を少なからず受けていることを考えておかねばならない。さて、小規模「軽トラ市」の受け皿として想定したのは、小学校区を単位とする校区自治会(51)、自治会を有している公営住宅(13)、組織化されている商店街(22)、スーパー・ホームセンターの大型店舗(60)の146団体である。回収は、校区自治会(40)、公営住宅(7)、商店街(12)、大型店舗(21)の80団体であり、回収率54.8%であった。

○開催意向

まず、「軽トラ市」の認知から状況を確認してみる。豊橋市から三大軽トラ市の1つで

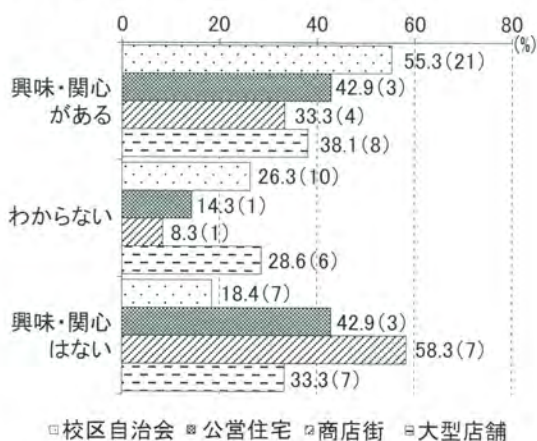


図1 軽トラ市導入への興味・関心

ある新都市までは、車で30～40分と近い。そのため約半数が「軽トラ市」の内容を知っているとしている。図1は、こうした条件を踏まえた「軽トラ市」導入への興味である。全体では46%と約半数が興味を示していることが分かる。団体別にみると校区自治会は5割を上回り、公営住宅と大型店舗も4割と続く。調査結果からは、小規模「軽トラ市」が望まれている印象を持った。

開催目的をみると、団体ごとに差が出ている。校区自治会では、「地域活力の維持・向上」、公営住宅では「買い物弱者の支援」と「地域住民の交流」、商店街は「地域活力の維持・向上」と「地域住民の交流」、大型店舗は「売り上げの増大」である。現段階では、まだ漠然としているが、こうした目的性を共有することが重要であろう。

次に開催方式を図2に示してみる。「他団体が開催してほしい」が半数であり、小規模「軽トラ市」を受け入れるという姿勢である。

従来の「軽トラ市」が地元運営団体の主導によっているのとはかなり異なる。これを前提として3つのシナリオが考えられるだろう。第1は地元の自発性を高めるという王道である。確かに、少数であるが主催したいという校区自治会があり、そこから事例を作ることである。また、「実際の開催を見てみたい」という団体が半数程度あり、既存「軽トラ市」を学びの場として、自発性を喚起するというものである。第2は、開催場所の準備は地元団体の活動として、出店車の手配は全市的に行うものである。一定の開催場所が整えば、出店機会が確保され、出店体制が整うことに繋がる。そして第3のシナリオが、集成型「軽トラ市」を行う人材が、分散型「軽トラ市」の運営をサポートするというものである。「軽トラ市」は人が創り上げるものであり、こうした人のネットワークが不可欠である。勿論これはスケッチに過ぎないが、地域の疲弊は厳しいものがあり、早期の対応をと

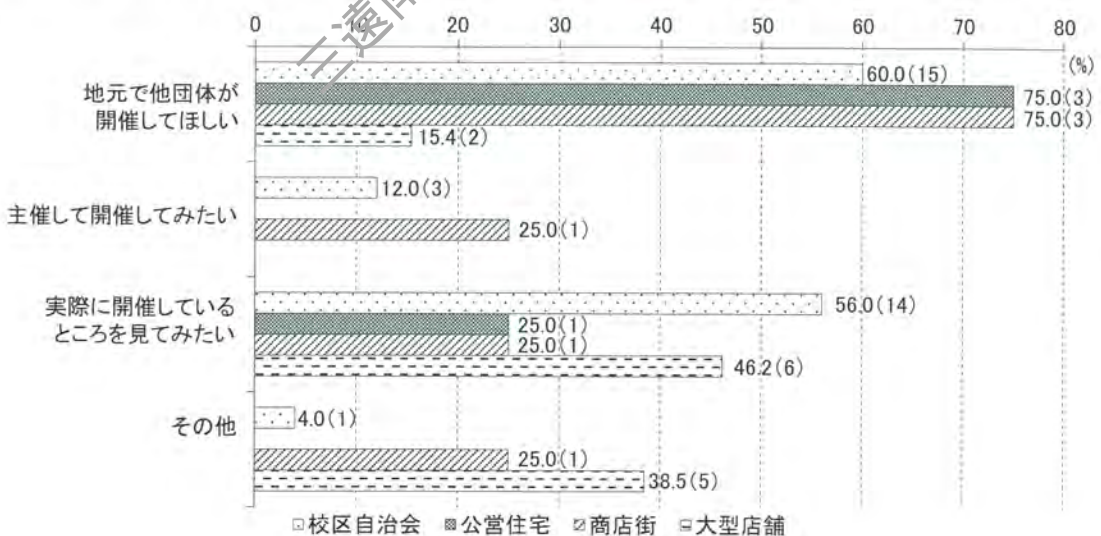


図2 軽トラ市開催方式（複数回答）

思わされる。

○開催内容

開催内容について触れてみたい。開催場所と販売品目、出店台数、開催頻度という基本的な内容である。まず、開催場所では、広場・公園が最も多く、次いで駐車場である。具体的には、近隣の公園、小学校、公民館などがあげられている。次に、販売品目への期

待である(図3)。全体的に食品が主であることが分かるが、買い物弱者支援を開催目的にあげた公営住宅では、生鮮食品が多くなっており、移動スーパーに近い期待である。また商店街も生鮮食品への期待があらわれている。さて、これらを実施する出店台数であるが、全体的に3~10台程度の要望とみてとれる。校区自治会ではやや台数が少なく3~5

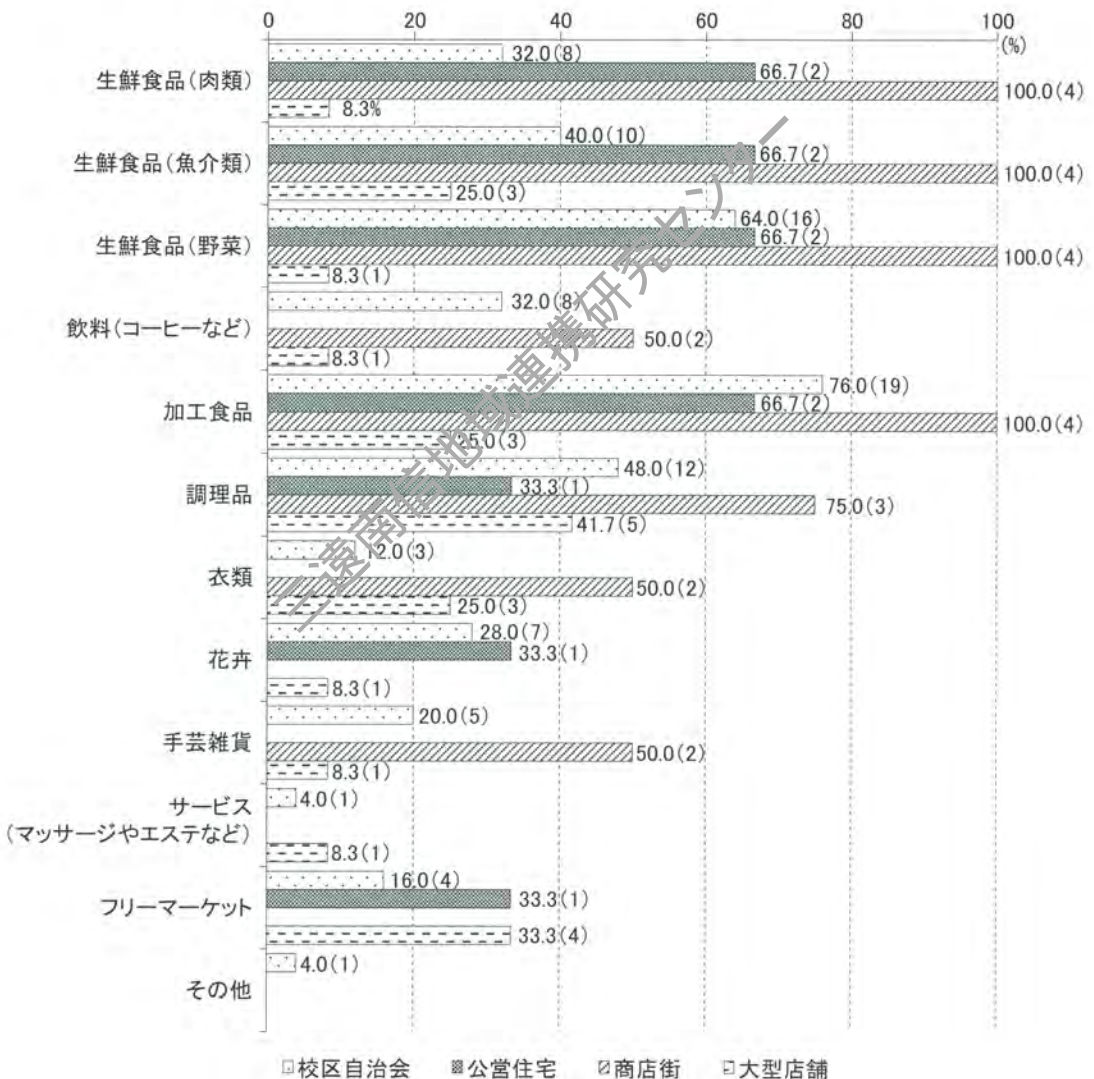


図3 軽トラ市の販売品目(複数回答)

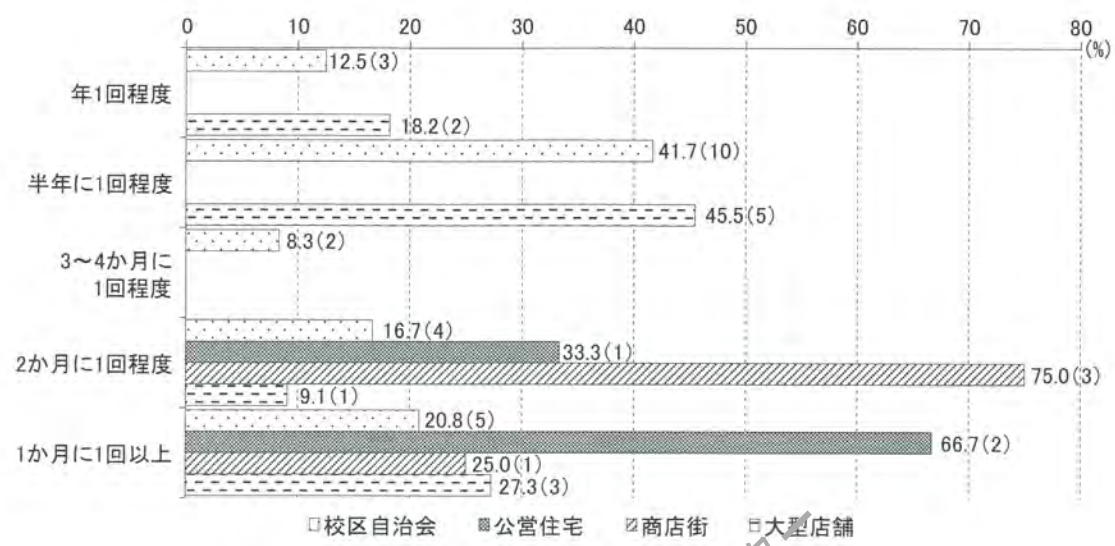


図4 軽トラ市の開催頻度

台、商店街や大型店舗では自らの店舗への集客効果を期待するために、台数が増える傾向にある。

最後に、開催頻度を図4に示す。この結果からみると、半年に1回程度から始めるのが良いようである。具体的な記述をみると、恒例のイベントに重ね合わせるという発想が多い。興味深いものでは、防災訓練と併せるといったものもある。被災後の仮設的な生活機能に「軽トラ市」を組み合わせることは確かに有効である。また地域の文化として、既存の朝市と連動することも期待されている。一方、2ヵ月に1回や毎月の開催という回答も4割程度あり、公営住宅では毎日という要望も出ている。既存の「軽トラ市」でも日常生活を支える必須型のものもあり、参考となるだろう。

○課題と情報

初期的な調査であるが、分散型の小規模「軽トラ市」への地区需要をみてみた。個人的には、結構な需要があるという感触を得

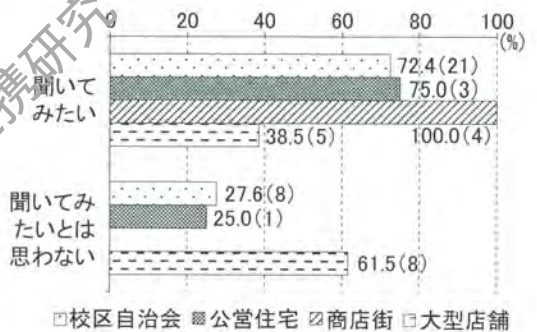


図5 軽トラ市の説明期待

た。課題を聞いているが、「開催方法が分からない」が6割と最も多い。これは当然の結果である。具体記述では、「必要な運営組織を知りたい」、「販売者との共通理解の場づくり」など踏み込んだものもあった。さて、これらを踏まえて、次の段階に移ることが重要であるが、それがより具体的な情報共有となるだろう。説明会参加の希望を図5に示すが、6割を超えている。今回の調査結果も、分散型の小規模「軽トラ市」を構想する一段階と考えられるのではないだろうか。